

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 9 月 8 日 8:21AM 更新

[日経平均・TOPIX]

【当面の想定レンジ】(日経平均) 49,500～70,000 円
(TOPIX) 3400～4250

[NY ダウ・S&P500]

【当面の想定レンジ】(NY ダウ) 45,000～54,700 ドル
(S&P500) 6300～7800

[ナスダック 100]

【当面の想定レンジ】(ナスダック 100) 23,500～30,650
(ナスダック総合) 20,700～27,000

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 140.000～161.000 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 98.000～102.720

エリオット波動とは

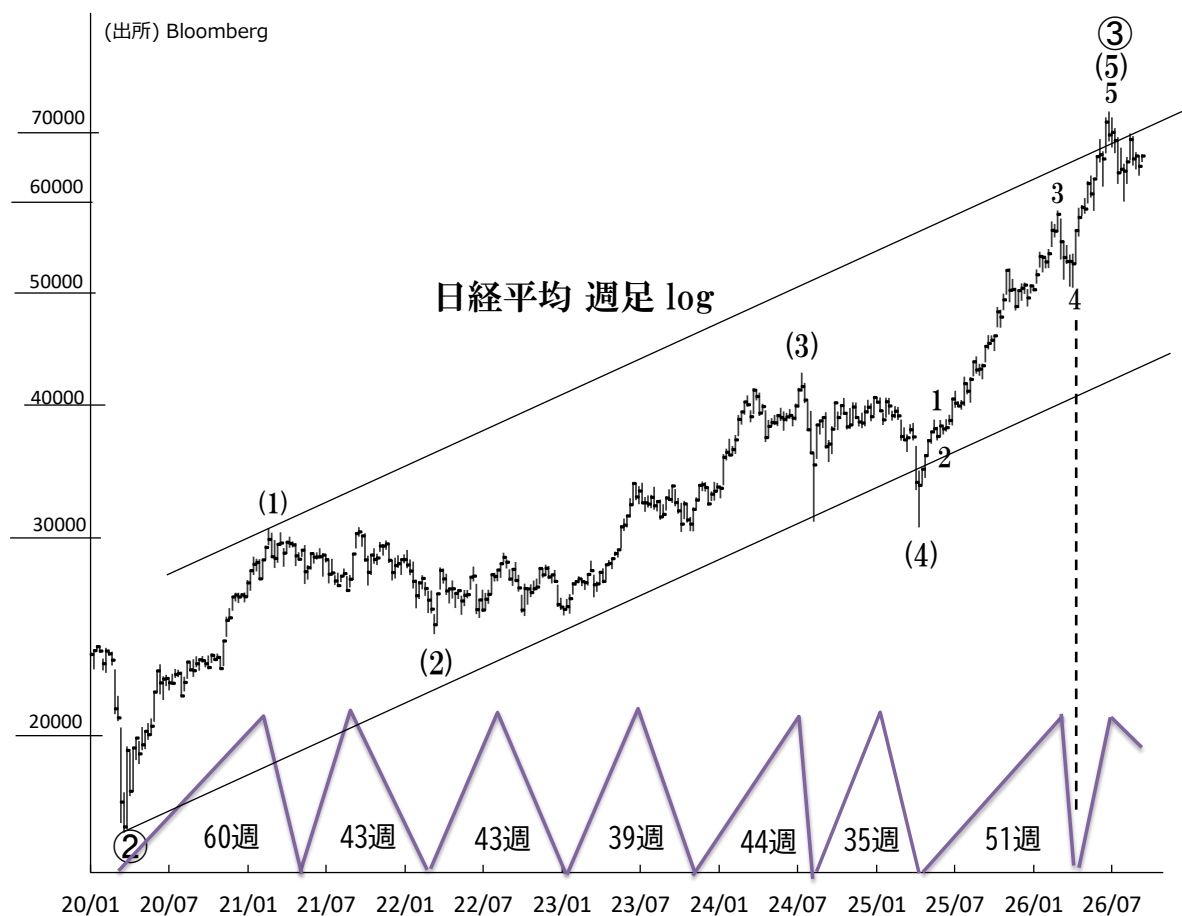
株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は 5 つの上昇波と 3 つの下降波（合計 8 つの波）で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均・TOPIX



【週足 エリオット波動分析】

72,831 円(6/22 高値)以来、プライマリー第④波の弱気相場が進行中とみています。

3 月末(50,558 円)から始まった現行週次サイクルは、弱気相場に特有の「レフト・トランスレーション(右肩下がり)」になる公算が大きいです(上昇期間よりも下げ期間が長くなります)。

現行サイクルの上昇期間はフィボナッチ 13 週(両端入れ)の長さでした。サイクル全体が 37 週～53 週(※1)ということから、6 月 22 日(サイクルトップ)からの通算下げ期間は、24 週～40 週(5 カ月～8 カ月)と推定されます。

換言すると、日経平均は今年 11 月～来年 3 月まで下値模索の展開が続くと予想されます。

「レフト・トランスレーション」のパターンでは、サイクル終点の安値がサイクル始点安値を通常は下回ります。つまり、少なくとも 50,558 円を下回るまで(※2)現行週次サイクルは終わらないでしょう。

(※1)週次サイクル期間(2020 年以降の補正後)は 45 週±8 週(37 週～53 週)。

(※2)サイクルの高値から安値まで、下げ率は 10%～26%(平均 17%)。今サイクル安値が 50,558 円未満であると仮定すると、現行サイクルの下げ率は 30%を超えることになる。



[TOPIX]

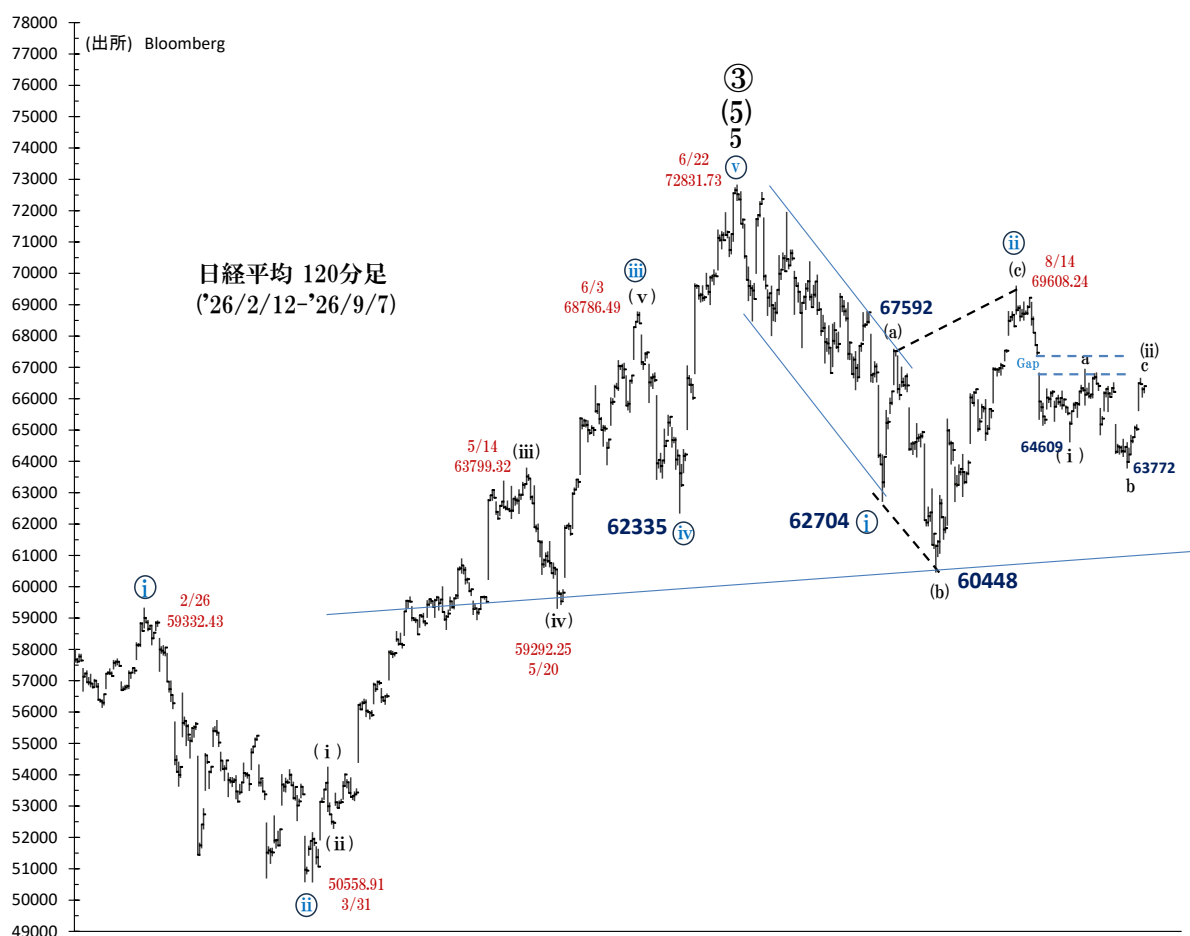
3,880(8/3 安値)からのマル v 波による上昇は 4220(8/14 高値)で終了した、とみています。トライアングル後のマル v 波「thrust、スラスト」は予想されたように、ごく短期間の上昇にとどまりました。

3 月末からの週次サイクルでは、日経平均は高値までに 13 週かかりました。それに遅れて TOPIX は 8 月第 2 週にトップアウトし、3 月安値から 21 週かかりました。いずれもフィボナッチ数を反映しています。

そして市場ボリューム(株価の先行指標)をみると、プライム市場の売買代金(20 日平均)は TOPIX 高値の 2 カ月前にトップアウトしており、重要な天井を付けたことが示唆されています。

25 年 4 月からのサポートライン(今週は 4025)を週末値で下回ると、プライマリー第④波調整入りの確信が高まります。

プライマリー④波の調整規模は、プライマリー第②波(2018 年 1 月～20 年 3 月)の下げ率(37.2%)と同等か、それ以上の大きさになると思われます。それでも予想される日経平均の下落スケールよりは、浅めのものといえるでしょう。



[日経平均・120分足]

69,608 円(8/14 高値)から、マル iii 波の下落が進行中とみています。このマル iii 波の副次波であるメヌエット級第(ii)波が、64,609 円(8/25 安値)から展開中です。

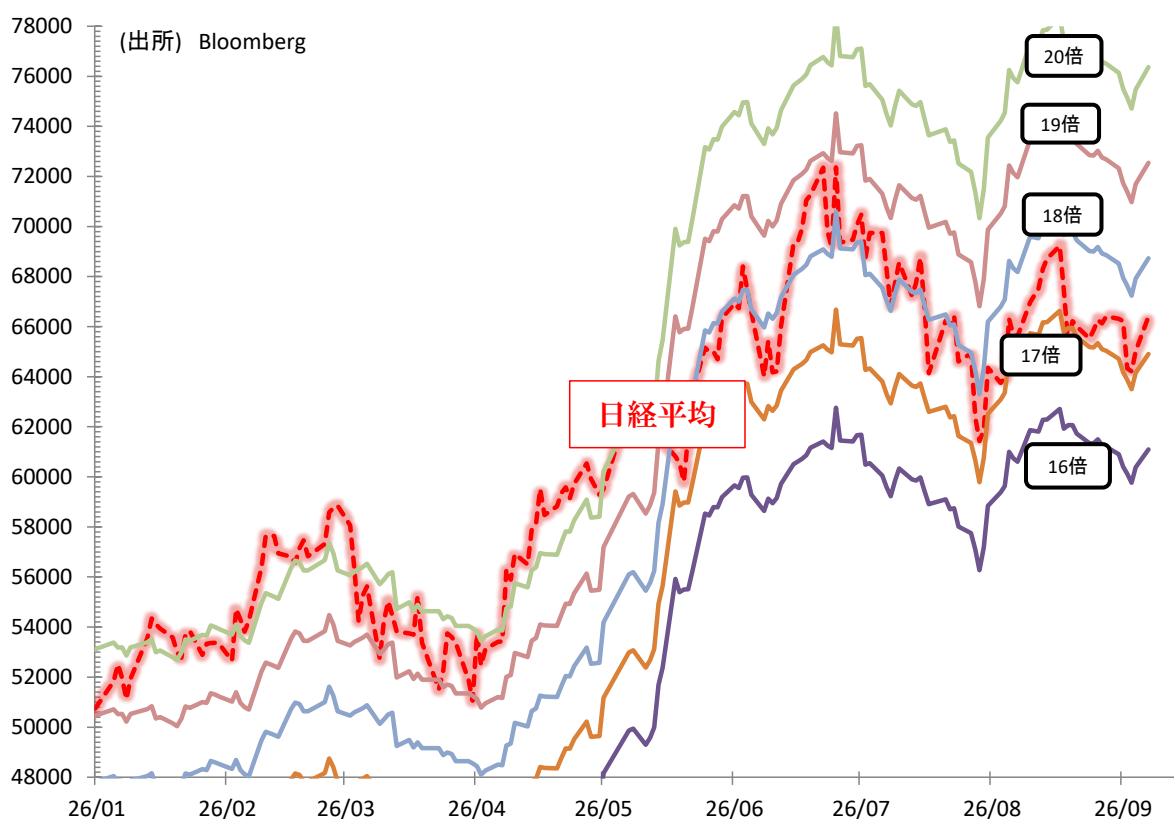
9 月 7 日は一時 66,668 円まで上昇しました。直前高値である 66,954 円(8/27 高値)を抜けば、次は 8 月 18 日のマド埋め(67,368 円)も視野に入りますが、マド埋めが必須ということではありません。

一方、9 月 4 日のマド埋め(65,182 円)は、第(iii)波の下落スタートを暗示するでしょう。

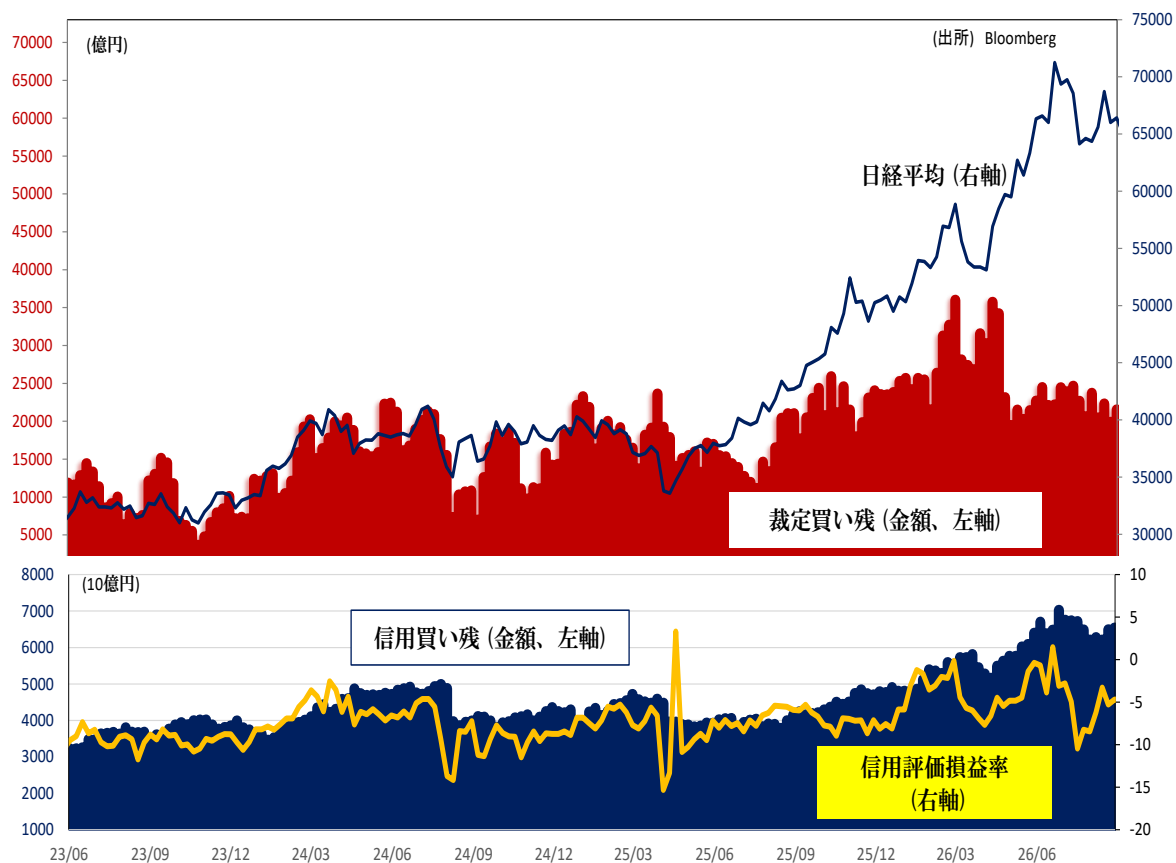
マル iii 波の長さは通常、マル i 波の等倍-1.618 倍になります。これによると、マル iii 波の想定下値レンジとして[59,481 円-53,222 円]が導かれます。

[予想 PER 別の日経平均水準]

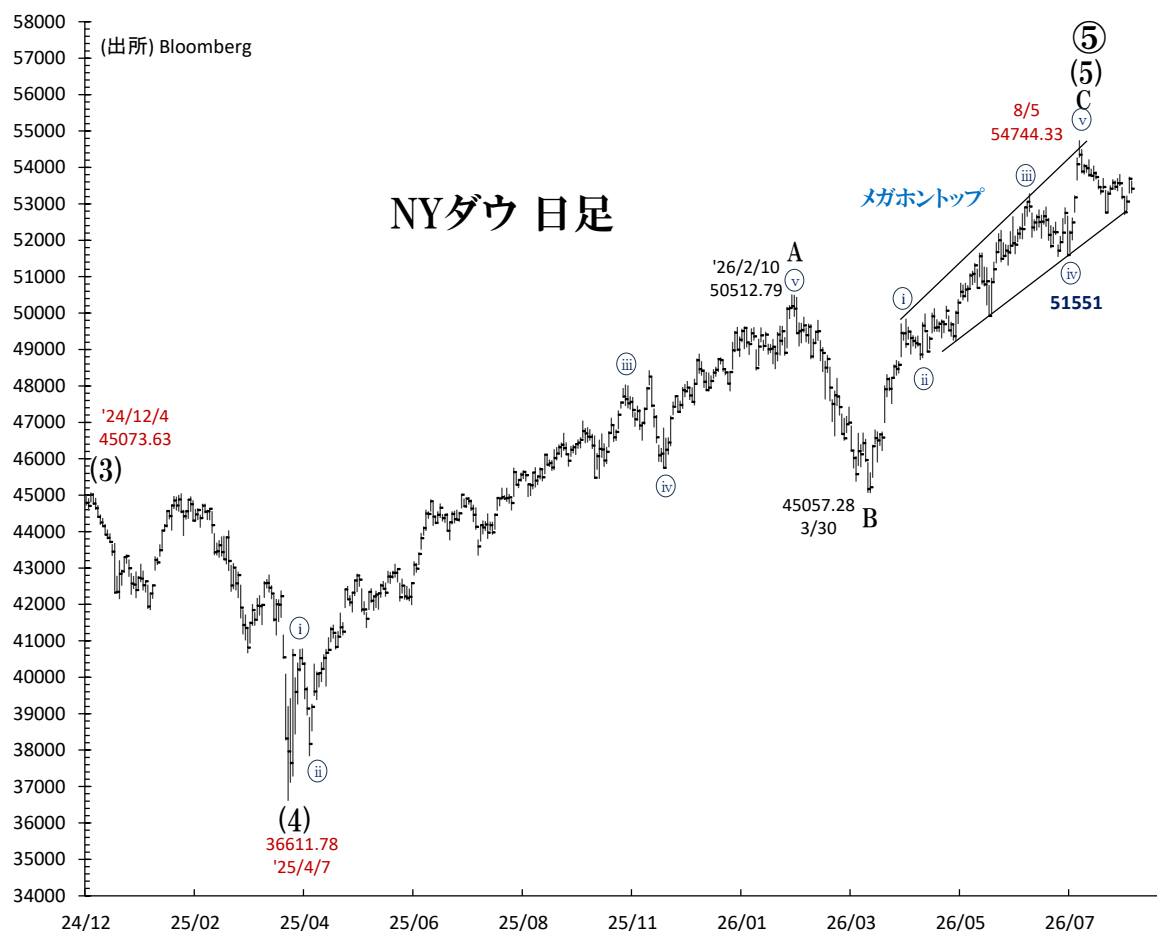
9 月 7 日の日経平均予想 PER は 17.39 倍、予想 EPS は 3818 円。過去最高の予想 EPS は 3922 円(6/25)です。



[裁定買い残と信用買い残] (8月28日時点)



NY ダウ・S&P500



【NY ダウ 30 日足 エリオット波動分析】(9 月 7 日の米株市場はレーバー・デーのため休場)

ナスダック総合指数は 6 月 1 日に、ナスダック 100 は 6 月 3 日に、各々ザラバの最高値を記録しました。やや遅れて 6 月 22 日には SOX 指数が最高値を付け、7 月末にかけて一時 28%下落しました。

ダウ輸送株が最高値を記録したのは 4 月 22 日のことで、ダウ 30 は 8 月 5 日、S&P500 は 8 月 13 日に各々、最高値を記録しています。これら指数の高値時期が異なる「未確認」パターンは、米株全体が天井圏にあることを示唆しています。

NY ダウのチャートは 4 月下旬から、「メガホントップ」—ブロードニング(拡散)フォーメーションとも呼ばれます—の天井パターンを形成していましたが、それは 8 月 5 日の高値(54,744 ドル)を以て完成した可能性が高いでしょう。

52,754 ドル(8/20 安値)からの「フラット」によるリバウンドの終了は近いとみられます。52,691 ドル(9/1 安値)を割ると、本格的な調整入りが暗示されます。



【S&P500 日足 エリオット波動分析】

6 月から 2 カ月近くにわたる「トライアングル」は、マイナー級の第 4 波に当たります。横ばいのパターンから上放れた波はマイナー第 5 波です。第 5 波は 25 年 4 月からの一連のマイナーウェーブにとって「最後の上昇」であり、その完成を以て S&P500 は強気相場のすべてを完成します。

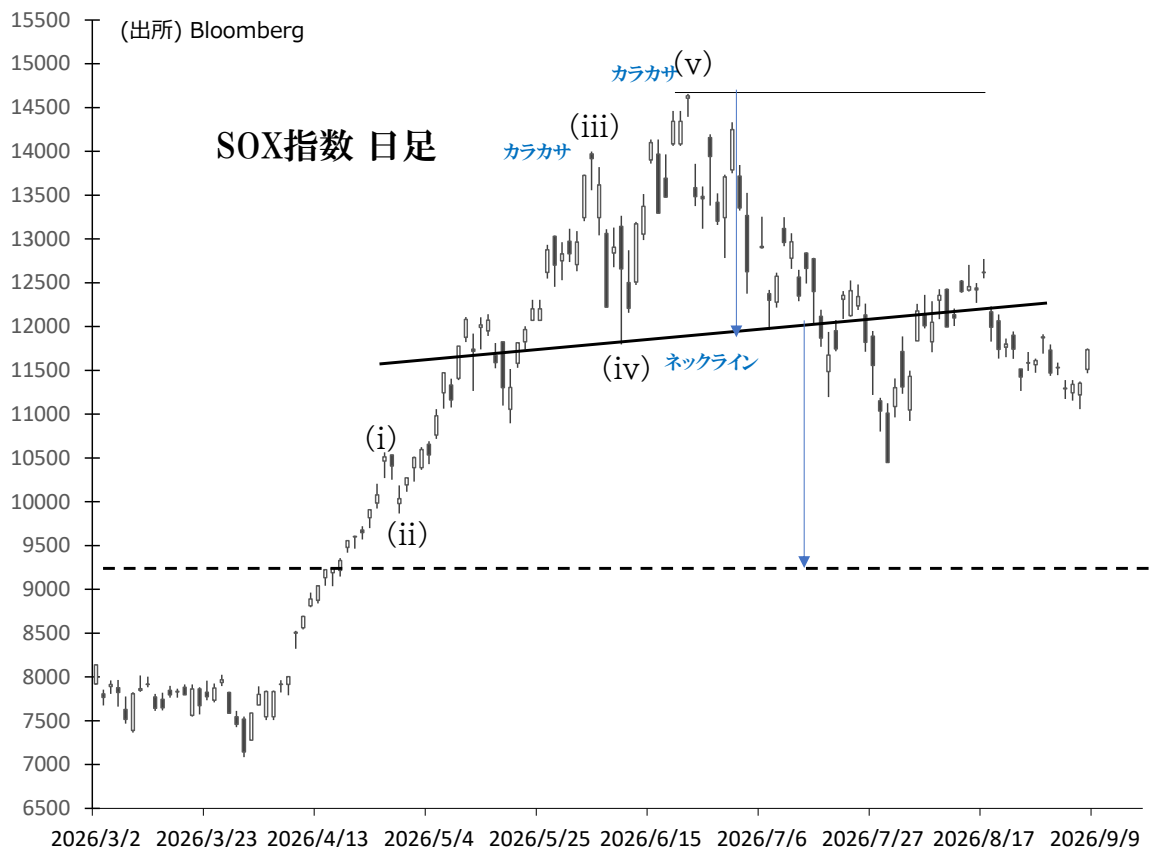
指摘のように、6 月から 2 カ月間の「トライアングル」、そこからの急激な上昇「スラスト」、これら一連の動きは本邦 TOPIX に酷似しています。

S&P500 の高値(7816)は 8 月 13 日、TOPIX の高値は 8 月 14 日です。これらインデックスは、同時に終了した可能性があります。

今後 7611(9/1 安値)を割ると、強い下げ波動のスタートが示唆されます。

SOX 指数

日足はネックラインを明確に下回っており、7 月末からのリバウンド完了が示唆されています。今後の下落リスクは高く、9 月～10 月に 9000-9500 へ下振れる可能性があります。

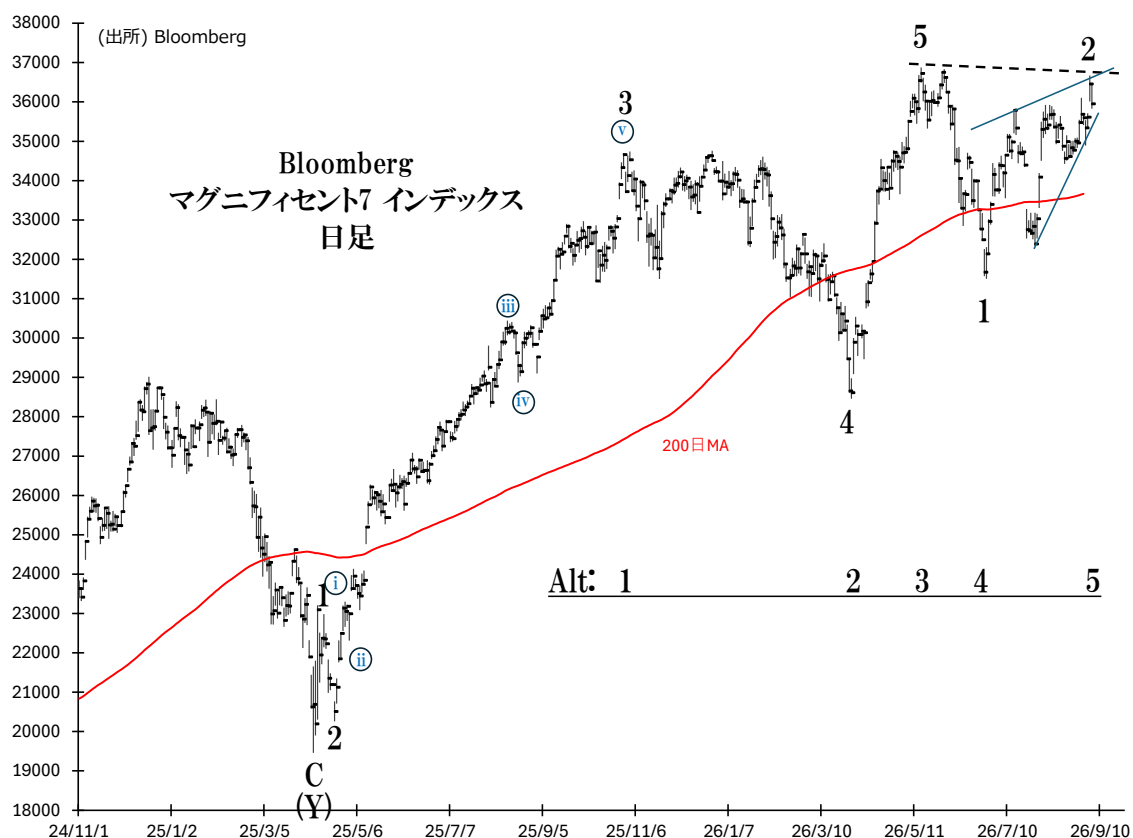


Bloomberg マグニフィセント 7 インデックス

マグ 7 は 5 月 14 日に最高値を付けており、他の主要指数に先行して高値を付けました。これは重要な天井パターン(未確認)です。

足元水準は 5 月高値に急接近していますが、このままなら「ダブル・トップ」ということになります。加えて 7 月下旬からの上昇ウェッジは、上昇から反落への急転が近いことを示唆しています。

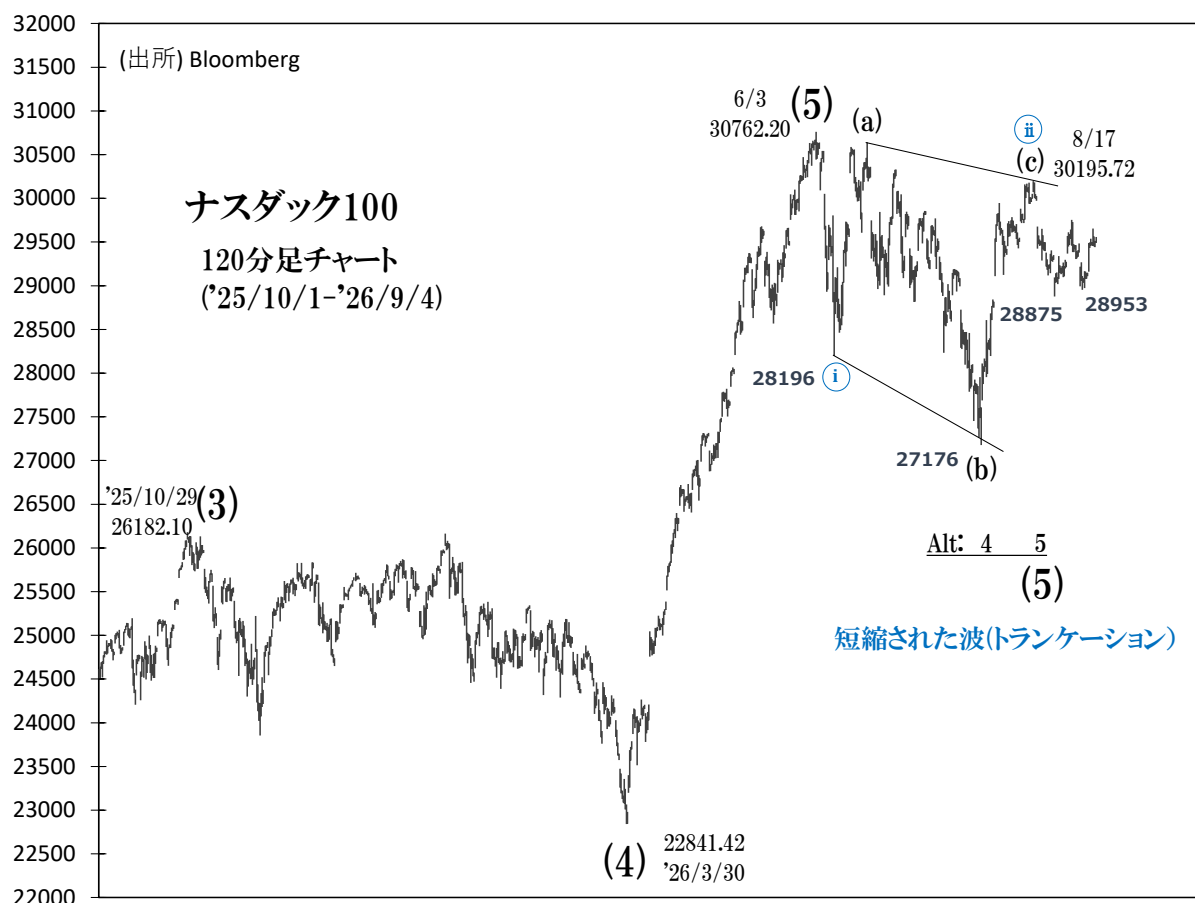
一方、高値を更新する場合には波動カウントを改めます。この場合、6 月下旬からの上昇は第 5 波による上昇と読み換えられます(チャート上で Alt と表示)。



[ダウ輸送株平均]



ナスダック 100



【ナスダック 100 時間足 エリオット波動分析】

28,196(6/9 安値)からのマル ii 波(ランニング・フラット)は、30,195(8/17 高値)で終わったと思われます。そこからマル iii 波による下落が開始された可能性があり、それは今後 27,176(7/30 安値)を大きく下回る、強い下降波になるでしょう。28,875 を割ると、マル iii 波入りとの見方がさらに強化されます。

なお、以下の代替カウントも現行カウントと同列に捉えています。

(オルタナティブカウント、Alt)

27,176 からの第 5 波による上昇は、30,195(8/17 高値)を以て完了したとみられます。

第 5 波は 6 月高値を上回ることができない、トランケーション[truncation/切り捨て、短縮]です。

トランケーション(※)は、6 月から 7 月までのナスダック 100 の下げが大き過ぎたことに起因しています。潜在的な下落圧力が非常に強いために、高値更新に必要とされる第 5 波の出力が不足したと考えられます。

(※)旧呼称は「フェイラー、失敗」

米ドル/円



【月足・エリオット波動分析】

日米実質金利差から導かれる米ドル/円の水準は、現在1ドル=140円程度です。日本円は1年以上も、金利差からの妥当な水準より、極端に過小評価された状態に置かれてきました。

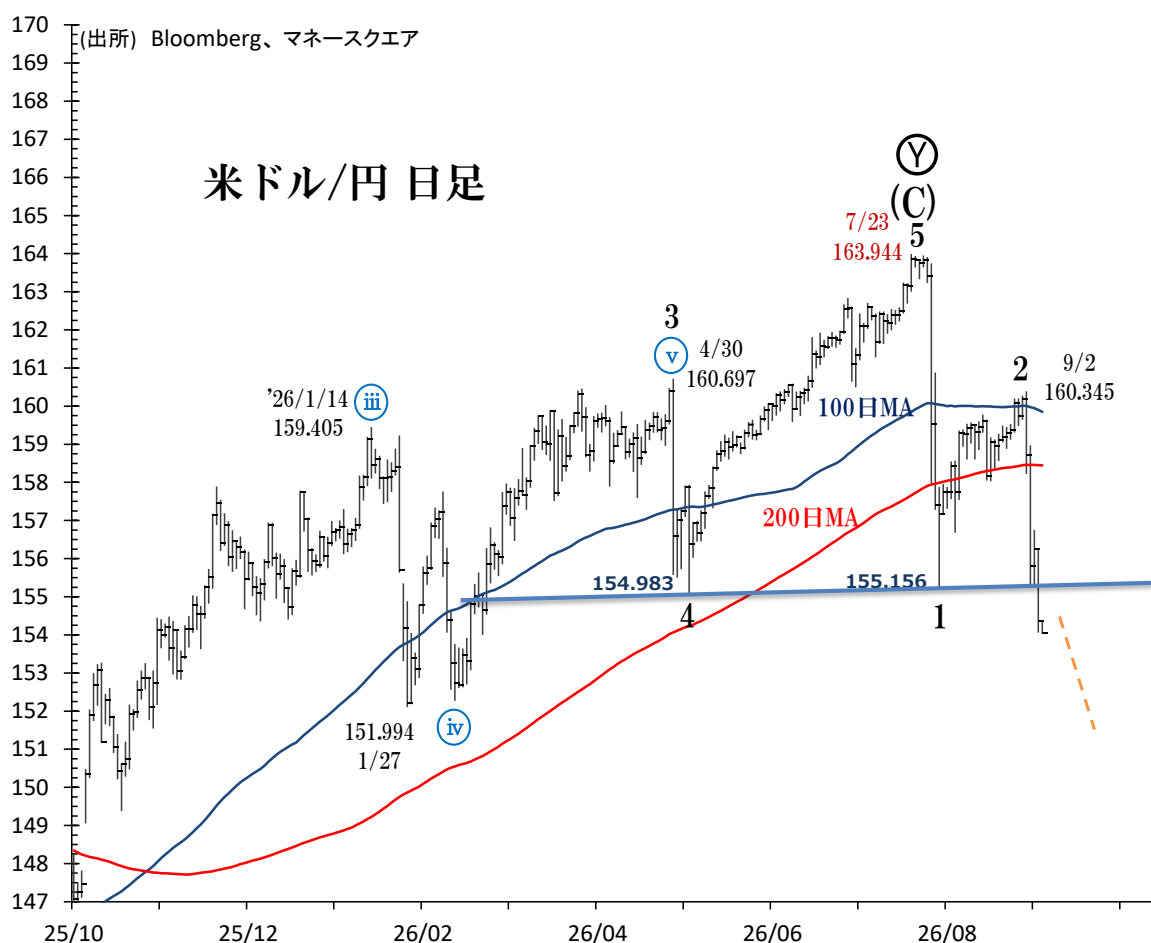
また、購買力平価からの妥当な円相場は OECD 算出の GDP ベースで1ドル=97円～103円です。長期的にも日本円は著しい過小評価が続いています。

163.944円(7/23)を以て通算5年間の円安Y波[ウェッジ]は完了した、とみられます。なおウェッジ内の副次波は、相互に美しい比率を示しています。すなわち(C)波の長さは(A)波の0.703倍であり、(E)波の長さは(C)波に対し、同じく0.703倍となっていました。

この先は数年間にわたる円高になるでしょう。上記のように、長らく日本円はその実力に比べ過小評価されてきましたが、今後は実力に見合った適正な水準が模索されていくと思われます。

7月末の日米協調円買い介入は、円安の限界水準(160円台前半)を明示しており、もはや積極的な円売りの動機は失われたといえます。今後は次第に円高傾向が強まっていくでしょう。

筆者は今後数年内(2028年?)に、1ドル=120円-125円を付けてもおかしくない、とみています。それは歴史的なレンジ[80円-160円]の中値に相当し、かつて「黒田シーリング」と言われた水準でもあります。



【日足 エリオット波動分析】

9月7日は一時154円台前半へドル安・円高となり、さらに執筆時点では154円を一時割れています。過去半年にわたる「ヘッド・アンド・ショルダーズ」のネックラインを明確に下回ったことを契機に、円高基調が加速し始めているようです。

ドル/円は短期的にも152円処を試す可能性があります。それは25年4月(139.577円)からのドル/円上昇の半値戻り[151.910円]に相当し、今年1月27日に付けた151.994円でもあります。

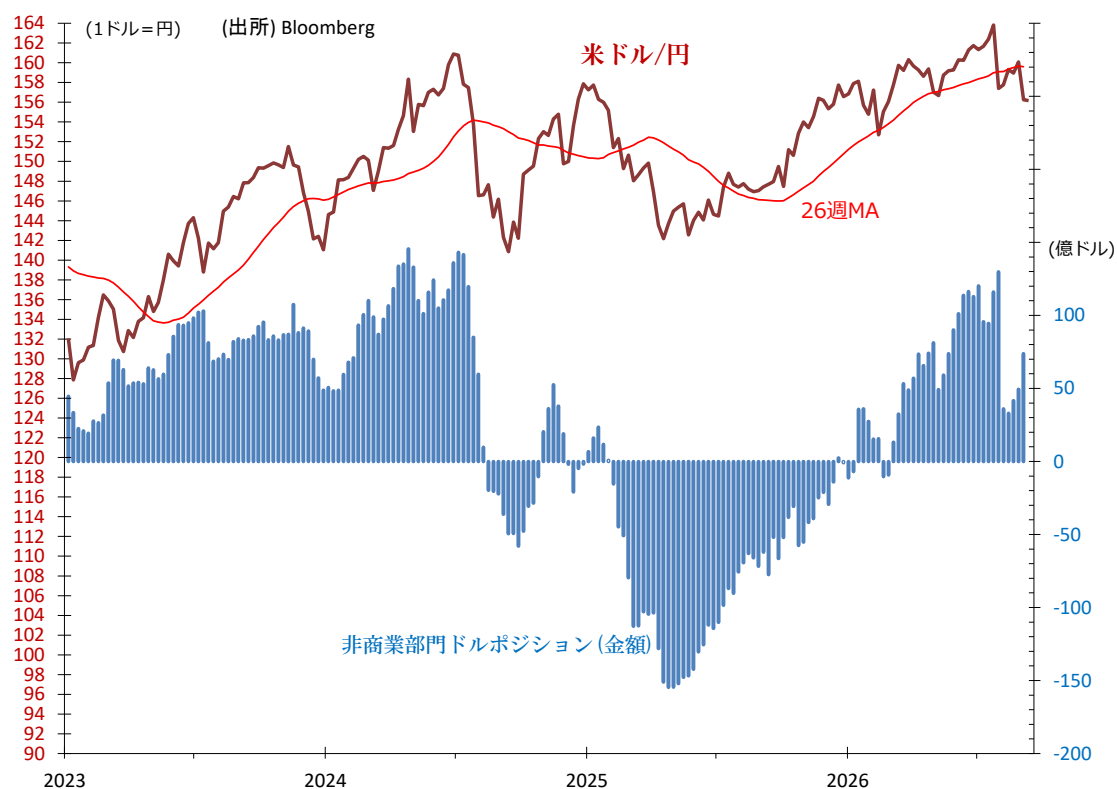
152円より下の節目は、心理的節目の150円です。その直下には61.8%戻り水準[149.070円]が控えています。

もっとも150円処は一時的なサポートに過ぎないでしょう。

ヘッド・アンド・ショルダーズからの垂直計算に基づくターゲットは「145円-146円」です。

金利差からのドル/円推計値

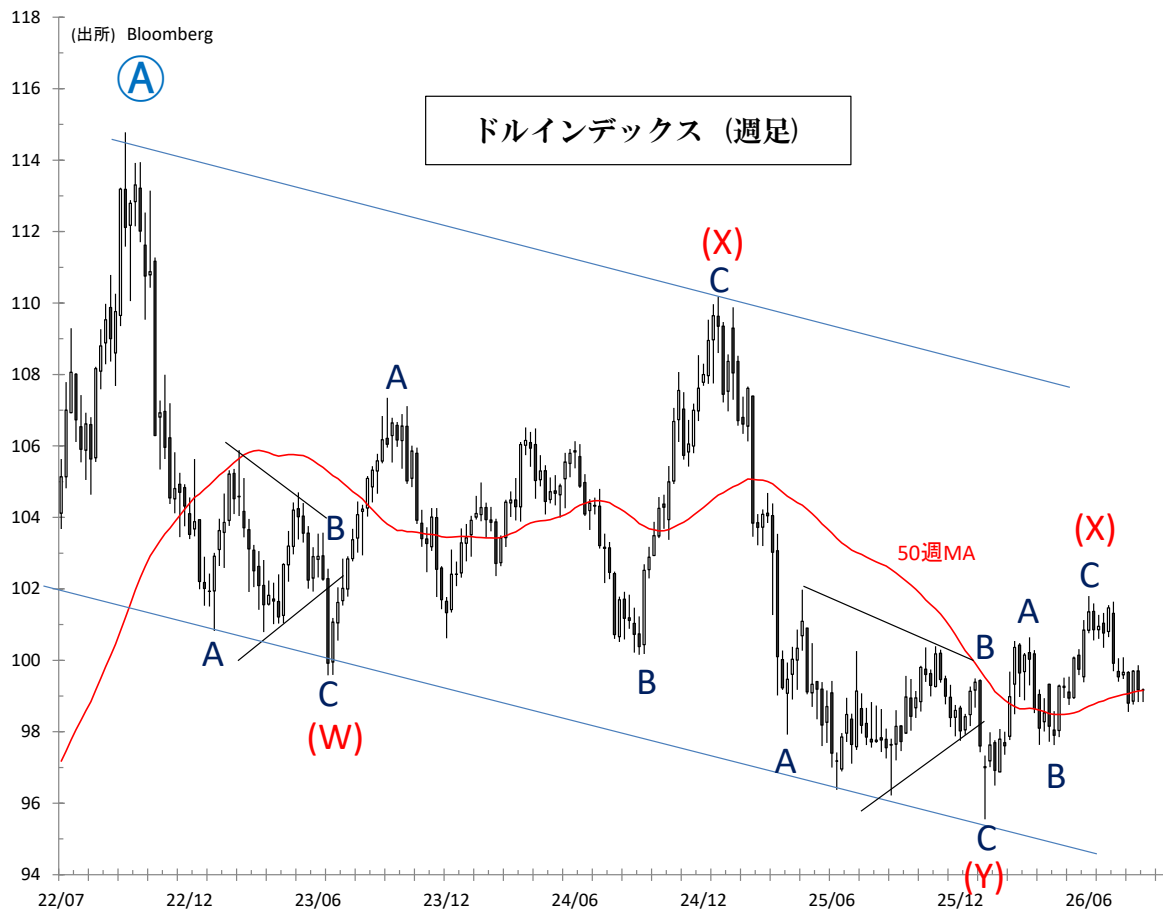
足元、日米実質金利差からのドル/円推計値は[140.873円]です。



円売り持ちは3週続けて拡大 (2026年9月1日時点)

IMM 通貨先物市場での投机筋(非商業部門)の円売り持ち高は、前週の49.42億ドルから73.8億ドルへ3週続けて拡大しました。

ドルインデックス (ドル指数)



【エリオット波動分析】

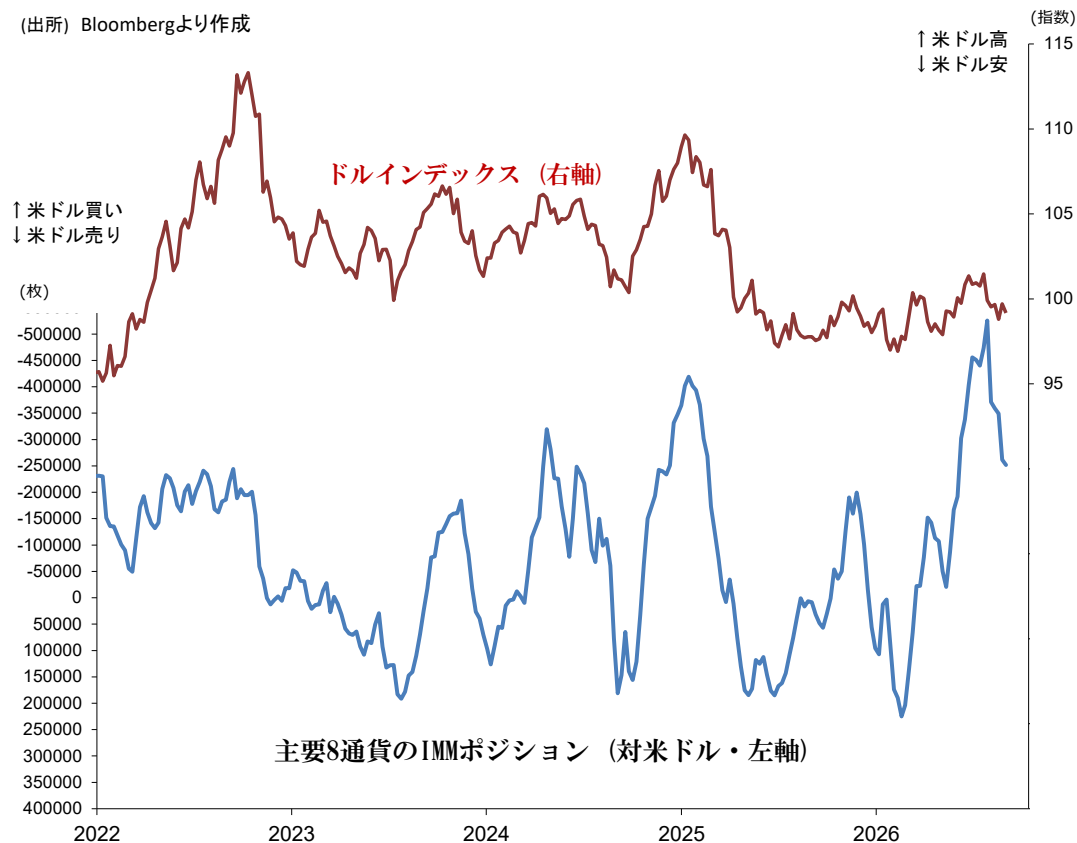
22 年 9 月高値からのドル安⑥波は、「トリプル・ジグザグ(W)-(X)-(Y)-(X)-(Z)」のコースを辿っています。長期タームの見通しは引き続きドル安です。

今年 1 月安値からの⑥波-(X)波による戻りは、101.800(6/24)で完成したとみられ、そうであれば、持続的なドル安トレンドが再開した可能性があります。

この 8 月は、7 カ月間にわたるサポートラインを明確に下回りました。旧サポートラインは、98.557(8/20)からのリバウンド(マル ii 波)にとって重いレジスタンスになるでしょう。98.557 を割るとマル iii 波によるドル安入りが示唆され、次は 97.625(5/6)を試す展開が想定されます。

投機筋のドル合成ポジション買い持ち高は 5 週連続で縮小

投機筋によるドル合成ポジション買い持ち枚数は、9 月 1 日時点で 25 万 1926 枚と、前週の 26 万 1954 枚から縮小しました。縮小は 5 週連続です。



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差（スプレッド）があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4% 以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率（為替リスク想定比率）を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率（為替リスク想定比率）は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10% です。

金融商品取引業 関東財務局長（金商）第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
